

## 形式副詞ホドの非常の用法について

平成 11 年度入学 平成 13 年度専攻決定  
応用言語学専攻 1LT99097W 為頼 梨絵

平成 16 年 1 月 9 日提出

## 要 旨

この論文では、非常の程度を表す形式副詞のホドがどのような条件で用いられるかを考察する。「非常の程度を表すホド」を用いた表現が容認される条件は、「ホド」を修飾し補足する「補足成分」が語であるか節であるかによって異なっている。補足成分が語である場合、(i) 補足成分に“程度を表す副詞”が付いていないこと、そして (ii) 補足成分の述語が項に有生物が関わるタイプのものであること、という二つの条件が求められる。一方、補足成分が節である場合は、補足成分に“程度を表す副詞”が含まれていても、補足成分の述語が項に有生物の関わらないものであっても良い。この違いは、両者における「補足成分の述語」と「ホド」との関わり方に関する構造的な違いにあると考えられる。補足成分が語である場合も節である場合も、どちらも「ホド」に付いて程度を表すという点では共通するが、その構造は大きく異なり、したがって両者に求められる条件も異なるのである。

## 目次

0. はじめに.....	1
1. さまざまなホドの用法.....	3
1.1. ホドの名詞的用法.....	3
1.2. 「ホド」の副詞的用法.....	4
2. 「非常のホド」と補足成分.....	7
2.1. 先行研究.....	7
2.2. 補足成分が語である場合.....	8
2.2.1. 補足成分と品詞の関係.....	8
2.2.2. 補足成分と程度表現.....	9
2.2.3. 補足成分と有生述語.....	10
2.3. 補足成分が節である場合.....	12
3. まとめ.....	15
Appendix.....	17
1. 比例のホド.....	17
2. 通常のホド.....	19
3. 同程度のホド.....	20
参考文献.....	22

### 0. はじめに

日本語の「ホド」と聞いて頭に思い浮かぶのはどのような「ホド」だろうか。以下に「ホド」を使った例文をいくつか挙げる。

- (1) a. もっと自分の身のほどを知るべきだ。
- b. 見れば見るほどかわいい。
- c. 今日は昨日ほど寒くない。
- d. 仕事熱心なのは良いが、体を壊さないほどにしておけよ。
- e. 驚くほどよく落ちる。

「ホド」にはさまざまな用法があるが、実は上に挙げた「ホド」は、全て種類が異なる。普段我々は特に意識することなく「ホド」という語を使っており、ましてや「ホド」にどのような種類があるかについてなど、考えたことはないだろう。しかし、国立国語研究所(1962)によると、「ホド」は日本語の使用において 1000 語に一度ぐらいは出てくる、かなり使用頻度の高い語である。このように、使用頻度が高い割にあまり研究がなされていない語について、その意味・用法を改めて見直してみることは、日本語を見直す上でも大変意味のあることである。ではここで冒頭の例文に戻り、それぞれの用法を述べる。

- (1) a. もっと自分の身のほどを知るべきだ。 (名詞的用法のホド)
- b. 見れば見るほどかわいい。 (比例の程度を表すホド)
- c. 今日は昨日ほど寒くない。 (同程度を表すホド)
- d. 仕事熱心なのは良いが、体を壊さないほどにしておけよ。 (通常の程度を表すホド)
- e. 驚くほどよく落ちる。 (非常の程度を表すホド)

このようにホドの用法にはさまざまな種類があるが、なかでも使用頻度が高いのは「比例の程度を表すホド」と「非常の程度を表すホド」である。前者は、「～すればするほど...」の「ホド」と言えば、どのような意味で使われる「ホド」なのかすぐに分かるだろう。それに比べて「非常の程度を表すホド」の方は、「～なほど...だ」の「ホド」と言っても、どのような意味で使われる「ホド」なのか少々分かりにくいかも知れない。それでは以下に、「非常の程度を表すホド」を使った文をもう少し挙げよう。

- (2) a. 彼はあきれ**るほど**仕事をしない。  
 b. 君の気持ちは痛い**ほど**分かる。  
 c. 彼はしつこい**ほど**メールを送ってきた。

このようなホドの使い方が、「非常の程度を表すホド」と呼ばれるものである。ではここで、下の例文を見てほしい<sup>1</sup>。

- (3) a. \* [かなり驚く] **ほど**よく落ちる。  
 b. \* 彼は[相当しつこい] **ほど**メールを送ってきた。  
 c. \* 彼女の話は明らかな**ほど**疑わしかった。  
 d. \* 彼は**すごいほど**成績が良い。  
 e. \* 雨が激しい**ほど**降っている。

これらは(2)の例文と同様、非常の程度を表していると思われるのだが、これらの文は容認の可能性が低い。(2)も(3)も同じような文であるのに、なぜ(3)の文は容認の可能性が低いのだろう。(2)と(3)の間にはどのような違いがあるのか。本論文では、「非常の程度を表すホド」を用いたさまざまな例を取り上げながら、それらが容認される場合とされない場合にはどのような差があるのかについて考察する。そして、その考察結果から「非常の程度を表すホド」を用いた句や文が容認されるための条件を明らかにしていきたい。

まず、第1章では、奥津(1986)に基づいて「ホド」の全般的な用法について簡単に述べ、本論文の主題である「非常の程度を表すホド」が、「ホド」の用法全体の中でのどのような位置付けにあるのかを述べる。また、奥津(1986)の提案する「形式副詞」の定義、形式副詞の特徴などについても少し触れる。次に第2章では、「非常のホド」の用法について詳しく考察する。この節では特に、文の容認度に大きく関わる「補足成分」と呼ばれる要素に注目し、奥津(1986)の先行研究も踏まえながら、「非常のホド」と補足成分との関係について考察を進める。そして第3章では、第2章までの内容をもとに、「非常のホド」を用いた句や文が容認される条件についてまとめる。またAppendixとして、今回の「非常のホド」の研究に伴って得られた他の「ホド」の副詞的用法に関して、今回の研究に直接は関わらないが、「ホド」の用法を知るにおいて重要だと思われるものをまとめておいた。

<sup>1</sup> 筆者が容認可能性が低いと判断した例文には「\*」を付けたが、人によっては容認できると判断する場合もあるかも知れない。そのような判断の違いの理由についても、後でふれる。

## 1. さまざまなホドの用法

### 1.1. ホドの名詞的用法

冒頭の例文にも挙げたように、「ホド」には名詞としての用法もある。むしろ望月(1969)などによると、「ホド」はもともとは時間の程度あるいは経過を表す名詞であつたらしい。それが次第に意味が多様化し、抽象化して、補足成分を取って副詞句を作るという助詞的性格を持つに至った。「ホド」の名詞的用法については本論文では直接の研究の対象ではないが、そのような歴史的背景を踏まえ、ここで「ホド」の名詞的用法について簡単に触れておく。

「ホド」は現在では副詞としての用法が多く、名詞として使われることはあまり多くないが、奥津(1986)では、現代語においても名詞と考えられるべき「ホド」の用例として、次のような例を挙げている。

- (4) 「ホド」の名詞的用法
- この**ほど**ニューヨークで発表した新型
  - ほどよく焼けたら皿に取ります。
  - ものには**ほど**がある。
  - よく**ほど**を考えて行動せよ。
  - よろしくお引き立ての**ほど**を願ひあげます。(奥津 1986:53)

奥津は、これらの「ホド」は、時・所・程度などを意味する名詞であるが、中には慣用的なものもあり、「ホド」の名詞的用法は現在では極めて限られているのではないかと述べている。確かに、このように名詞として程度を表す場合、奥津の指摘するように、現在では「ホド」よりも「程度」のような漢語の方がよく使われているように思われる。

また名詞の「ホド」には、上記のような用法の他に、「概数を表す形式名詞」と呼ばれるものもある。これは、「大根10本ほど」「およそ5時間ほど」という風に、数量名詞についてその数量をおよそのものとして示す用法である。奥津(1974)では、「ホド」は、数量名詞の前に来る「およそ」「約」「大体」「ちょうど」などと共に数量限定詞という特殊な品詞とされていたが、奥津(1986)ではこのような「ホド」は形式名詞と考えられている。その根拠は以下の通りである。

「ホド」が数量名詞につく場合、「ホド」は「5人」とか「親指の頭」とかいう数量を示す名詞を受けてそれを概数化し、「およその数量」を意味する役割を担っている。その場合、その数量名詞が「5グラム」「5cc」などのように直接的な数量ならば、そ

の文から「ホド」を抜かしても(5b)のように文法的なままであるが、「親指の頭ほど」という時の「親指の頭」のような間接的な数量表示の場合、「ホド」がないと(6)のように非文になってしまう。

- (5) a. 学生が5人ほどそこにいる。  
b. 学生が5人 そこにいる。
- (6) a. ヘアクリームを親指の頭ほど取って…。  
b. \*ヘアクリームを親指の頭 取って…。(奥津 1986:54)

つまり、(6)の場合のように「ホド」がないと文が成り立たないということは、言い換えれば「ホド」が「親指の頭ほど」という節における主要部分であって、先行する数量表現はそれを修飾する成分であると考えられる。したがって、「ホド」が数量名詞、またはそれに相当する表現を受ける場合、これらを「およそ」や「約」などの数量限定詞と同等のものとするより、一種の形式名詞であると考えた方が適当である。(奥津 1986:54-55)

## 1.2. 「ホド」の副詞的用法

次に「ホド」の副詞的用法について考察する。まずこの用法は大きく二種類に分けられる。第一に a. 程度そのものを意味する「ホド」、第二に b. 比例を表す「ホド」である。前者は更に(i) 非常の程度を示す副詞句を作るもの、(ii) 通常<sup>2</sup>の程度を示す副詞句を作るもの、(iii) 同程度を示す副詞句を作るもの、の三つに分類されるが、このうち特に本論文で中心的に取り上げるのが、(i) 非常の程度を示す副詞句を作る「ホド」である。

奥津 (1986)では、これら四種類の「ホド」を次のように呼んでいる。

- (7) a. (i) 非常の程度の「ほど」  
(ii) 通常<sup>2</sup>の程度の「ほど」  
(iii) 同程度の「ほど」  
b. 比例の「ほど」

本論文では、これらの呼称を更に以下のように統一したいと思う。

- (8) a. (i) 非常のホド  
(ii) 通常<sup>2</sup>のホド  
(iii) 同程度のホド

- b. 比例のホド

それではここで、四種類の副詞的な「ホド」を使った例文を、もう一度挙げておく。

- (9) 副詞的用法の「ホド」
- a. (i) 非常のホド 「生活していくのも苦しいほど給料が少ない。」  
(ii) 通常<sup>2</sup>のホド 「着物の帯はやや苦しいほどに / 程度に締めるものだ。」  
(iii) 同程度のホド 「今日は昨日ほど寒くない。」
- b. 比例のホド 「彼は、苦しければ苦しいほど頑張る人だ。」

これらの「ホド」については、奥津 (1986)に従って「形式副詞」という名称で呼びたい。奥津 (1986)では、これまでの伝統的文法では大きく「助詞」と分けられてきたカテゴリーに対し、そこに「形式副詞」という新たなカテゴリーを立てることを提案している。奥津は、従来の日本語文法において「助詞」とされるもののうち、助詞的性格を持ちながらも副詞的な働きをするものは、「助詞」というカテゴリーに一括するよりも「形式副詞」というカテゴリーに分ける方が適当である、としている。わが国の文法諸説には、形式形容詞、形式名詞など、「形式」という語のついたカテゴリーがかなりあるが、これらに共通する特色は、その意味が抽象的であり、それ故に常にそれを修飾し補足する成分(以下「補足成分」と呼ぶ。)を必要とする、ということである。つまりこれらは非自立的であり、従って助詞あるいは助動詞としてもいい性格を持ってはいるが、品詞としてはこれらは形容詞であり、名詞である。つまり、形式副詞とは「副詞ではあるが非自立的であり、補足成分をとって副詞句を成すもの」のことである。

それでは形式副詞のホドのうち「非常のホド」の例をとって見てみよう。

- (10) a. 彼は 驚く ほど 足が速い。  
b. 彼は とても 足が速い。

(10a)の「驚くほど」は彼の足の速さについて、その程度が非常に高いことを表している。よって「驚くほど」は程度を表す副詞句と考えられ、これは(10b)の程度副詞<sup>2</sup>と

<sup>2</sup> 森田 (2002)では、“種々の語に付いて、その事物の取り立て・限定・添加ないしは程度の意識を加える働きがある”ものを「副助詞」とし、その例に「だけ」「ばかり」「ぐらい」などを挙げており、「ホド」もこの部類に入ると思われる。

ても」と同様の意味と機能を持つ。ただ「とても」は自立的な副詞であるがホドは次の(11a)のように単独では使えない。つまりホドは非自立的な副詞であり、常に「驚く」のような補足成分を必要とするのである。

- (11) a. \*彼は ほど 足が速い。  
b. 彼は 驚くほど 足が速い。

また次のように、ホドの部分が省略され、「驚く」という補足成分だけでも非文となる。

- (12) \*彼は 驚く 足が速い。

このように、「驚くほど」が程度の副詞句をなす為には、ホドという程度を表す副詞と、その“程度”がどのくらいかを示す「驚く」という補足成分の両方が必要であるが、その句を“様態”や“頻度”ではなく、“程度”の副詞句たらしめているのはホドの部分である。つまりホドこそがこの副詞句を作るかなめであり、よってホドは助詞でありながら“程度”を表す副詞としてはたらく「形式副詞」であると考えられる。

副詞には自立的な副詞と非自立的な副詞があり、「形式副詞」は上で述べた通り、非自立的な副詞である。自立的な副詞と非自立的な副詞とを比較すると、どちらも程度なら程度、頻度なら頻度というように、ある特定の意味しか表さない点で共通している。しかし、同じ“程度”を表す副詞でも、自立的なものとは非自立的なものとは、副詞そのものが意味する内容が、厳密には異なる。例えば「とても」は自立的な副詞で、“程度”を意味して用言を修飾する。程度以外に様態や頻度を意味することはない<sup>3</sup>。さらに単に“程度”を意味するだけでなく、“その程度が高い”という意味をすでに含んでいる。それに対し「驚くほど足が速い」のホドは非自立的な副詞で、“程度”を意味する点では「とても」と同じだが、ホド自体は高低いずれの程度でもなく、ただ程度そのものを表す。その程度がどれほど高いかは、「驚く」という補足成分が表す。つまりホド自体は単に“程度”を示すのみで、「驚く」という補足成分があって初めて、「とても」と同じ意味を表す副詞句を構成することができるのである。

このことから、形式副詞を含む句において、事実上意味の役割を担っているのは補足成分だということが分かる。つまり、「非常のホド」に関して言うと、もしもその句

<sup>3</sup> 様態を意味する副詞には「ゆっくりと」や「勢いよく」などが挙げられ(仁田 1991:52)、頻度を表す副詞には「たまに」や「まめに」などが挙げられる(奥津 1986:74)。

が「非常のホド」として容認されないとすれば、それは補足成分が「非常のホド」の補足成分としては不適当であることを意味する。よって、「非常のホド」を用いた句や文が容認される条件を知るには、「非常のホド」の補足成分に求められる条件を知ればよいのである。

## 2. 「非常のホド」と補足成分

この章では「非常のホド」に的を絞り、「非常のホド」とその補足成分とが意味的にどのように関わっているのか、どのような語が「非常のホド」の補足成分となり得るのか、といった視点から、この二つの関係について考察していく。

### 2.1. 先行研究

まず先行研究として、奥津(1986)における考察を紹介する。奥津(1986)は「非常のホド」の補足成分について、その内容の非常性という視点から、以下のように述べている。まずは次の例文を見てほしい。

- (13) a. 死ぬ ほどに 疲れた。 「に」は任意の要素。  
b. 動けない ほど お腹が減った。  
c. ものも言えない ほど あきれた。 (13a)のみ、(奥津 1986:55)

これらの文はいずれも、「疲れる」「お腹が減る」「あきれる」の程度が非常のものであることを示している。ただし前述の通り、ホド自体は単に程度を意味するだけであって、非常の意味は、先行する「死ぬ」「動けない」「ものも言えない」という補足成分の内容によるものである。確かに「死ぬ」とか「動けない」とか「ものも言えない」というのは通常の事柄ではない。もっとも何が通常で何が非常かは、言語の形からは決められない。例えば、「死ぬ」が非常で「死なない」が通常だと必ずしも言えない。

- (14) 弾丸が6発あっても死なない ほど 頑健だった。(奥津 1986:56)

この文におけるホドの補足成分(「弾丸が6発あっても死なない」)の述語は「死なない」であるが、補文全体は非常の事柄を表している。このように、「非常のホド」が取り得る補足成分の制限を明示するのは極めて困難である。というのは、そこには我々が何を「非常のこと」と考え、何を「通常のこと」と考えるかという経験則が、隠れた基準として働いているからである。

このように、奥津(1986)では「非常のホド」が取り得る補足成分について、その内

容が非常であるか、という視点から考察を試みているが、これには奥津自身も述べているように大きな問題が残っている。ある事柄が非常かどうかというのは一概に決められるのではなく、その判断基準は個人の主観に拠るところが大きい。また(14)の「死なないほど」の例のように、それだけで考えると通常の事柄でも、ある文脈のもとでは非常の事柄になり得るものもあるので、非常かどうかの判断は文脈によっても変わってくる。このように、「非常のホド」の補足成分は非常の事柄を表している、という考察は、確かに「非常のホド」の特徴を述べたものではあるが、逆にそれを条件として、ある事柄が非常の内容を表していれば、それは必ず「非常のホド」の補足成分になり得る、と言うことはできない。なぜなら、その事柄が非常かどうかという判断はかなり主観的であり、はっきりとした根拠を持たないからである。よって、この考察は、「非常のホド」の補足成分となるためにはどのような条件が必要か、という問題に対する明確な答えとは言えない。

しかも奥津 (1986)では、「非常のホド」の例として専ら、非常の事柄を表す「節」が補足成分となる例を扱っており、本論文の冒頭部分で例文に用いた「痛い」「しつこい」のような、それ自体は特別非常の事柄を表さない「語」が補足成分となる例についてはほとんど触れていない。よって本論文では、さまざまな種類の補足成分を対象に考察を行いながら、「非常のホド」の補足成分に与えられる条件とは、という問題に取り組みたい。

## 2.2. 補足成分が語である場合

### 2.2.1. 補足成分と品詞の関係

以下では、「非常のホド」とその補足成分との関係について、例文を見ながら具体的に考察していく。まず、「非常のホド」が取り得る補足成分について品詞という視点から考えてみよう。「非常のホド」が取り得る補足成分の種類は非常に多い。補足成分となる要素は、形容詞であったり、動詞や代名詞であったりと様々である。また、補足成分は語であっても句であっても文であっても構わない。このように、「非常のホド」が取り得る補足成分の許容範囲は非常に広いが、それは副詞句の主要な役割がホドにあって、補足成分は必要ではあるが従属的な存在であるからであろう。つまり、補足成分の形や種類は、その副詞句にとって必ずしも第一義的に重要なことではない。要は、形式副詞の形式性を補って、「程度」の意味を表せば良いのである。以下は、ホドが取り得る補足成分の一例である。

- (15) a. びっくりするほど美しい。 (動詞+ほど) (奥津 1986:42)  
 b. 私には十分なほどだ。 (形容動詞+ほど)  
 c. あれほど言ったのに...

- d. おもしろいほどよく当たる。 (形容詞+ほど)  
 e. 心臓が止まるほど 驚いた。 (節+ほど)

- (16) a. 大空に繰り広げた曲芸飛行はため息が出るほど美しかった。  
 (森村誠一「紺碧からの音信」)  
 b. 弁髪を背に垂らした曲芸師は、細い竹の先で皿を空に投げあげたり、静止しているように見えるほど速く回してみせた。(加藤幸子「夢の壁」)  
 (両文とも 仁田 2002:151)

### 2.2.2. 補足成分と程度表現

ここからは「品詞」という視点を離れ、補足成分の内容に焦点を当てて考察していく。それではここで、冒頭で挙げた「非常のホド」の例文をもう一度見てみよう。

- (1) e. 驚くほどよく落ちる。  
 (2) a. 彼はあきれほど仕事をしない。  
 b. 君の気持ちは痛いほど分かる。  
 c. 彼はしつこいほどメールを送ってきた。  
 (3) a. \* [かなり驚く]ほどよく落ちる。  
 b. \* 彼は相当しつこいほどメールを送ってきた。  
 c. \* 彼女の話は明らかほど疑わしかった。  
 d. \* 彼はすごいほど成績が良い。  
 e. \* 雨が激しいほど降っている。

なぜ(1)や(2)は文法的な文なのに、(3)の文は容認の可能性が低いのだろうか。その理由を順に考察していく。まずは(3a,b)の文に注目してほしい。

- (3) a. \* [かなり驚く]ほどよく落ちる。  
 b. \* 彼は相当しつこいほどメールを送ってきた。

上の(1e)(2c)と比較すると、これらの補足成分である「かなり驚く」「相当しつこい」が、もともとの「驚く」「しつこい」に、「かなり」「相当」という「程度を表す副詞」を付けたものであることが分かる。もともとの補足成分であった動詞や形容詞に“程度を表す副詞”を付けることで、文法的であった文が容認の可能性の低い文に変わってしまったのだ。ということは、補足成分に“程度を表す副詞”が付いていると「非

常のホド」の補足成分にはなり得ないのだろうか。他の補足成分でもこのことが言えるか見てみよう。

- (17) この占いはおもしろいほどよく当たる。  
\*この占いは非常におもしろいほどよく当たる。
- (18) 恥かしいほど見られる。  
\*すごく恥かしいほど見られる。 (佐久間 1992:57)

確かに他の補足成分でも、もともとは補足成分になり得ていた語も“程度を表す副詞”が付くと補足成分になれないという現象が見られる。以上より、「非常のホド」の補足成分となるには、補足成分に“程度を表す副詞”が付いていないことが条件であると言えるだろう。これは、ホドという語自体が“程度を表す副詞”であるため、その補足成分にも“程度を表す語”があると意味が重複し、不自然になるからだと考えられる。

### 2.2.3. 補足成分と有生述語

それでは、次に(3c,d,e)の文について考えてみる。

- (3) c. \*彼女の話は明らかなほど疑わしかった。  
d. \*彼はすごいほど成績が良い。  
e. \*雨が激しいほど降っている。

これらの補足成分はそれぞれ「明らかだ」「すごい」「激しい」である。これらの語は「非常に」や「とても」などの“程度を表す副詞”は付いていないにも関わらず、文の容認の可能性が低いのはなぜだろうか。もう一度(1e),(2a,b,c)の文と比較してみよう。

- (1) e. 驚くほどよく落ちる。  
(2) a. 彼はあきれるほど仕事をしない。  
b. 君の気持ちは痛いほど分かる。  
c. 彼はしつこいほどメールを送ってきた。
- (3) c. \*彼女の話は明らかなほど疑わしかった。  
d. \*彼はすごいほど成績が良い。  
e. \*雨が激しいほど降っている。

それぞれの補足成分に注目し、「非常のホド」の補足成分になり得るものとそうでないものをグループ分けすると、以下のようになる。

- (19) a. 「非常のホド」の補足成分になり得る語：  
驚く、あきれる、痛い、しつこい  
b. 「非常のホド」の補足成分になり得ない語：  
明らかだ、すごい、激しい

上に挙げた2つのグループを比較してみると、まず補足成分になり得る語はどれも、その argument に必ず有生物が関わる述語（以下、「有生述語」と呼ぶ）であることに気づく。例えば「驚く」や「あきれる」という述語は「彼は驚いた」や「私はあきれた」のように主語に必ず有生物を取る。また、「痛い」や「しつこい」という述語も「私にとって）ひざが痛い」や「（私にとって）彼の態度はしつこい」というように、そこには必ず有生物が関わる argument が存在すると考えられるので、「有生述語」だと言える。それに対して補足成分になり得ない(3)の述語は、その argument に有生物が関わっていない。例えば「明らかだ」は「その事実は明らかだ」のように argument に非有生物のみを取る述語（以下、「非有生述語」と呼ぶ）であり、「\*彼女は明らかだ」のように argument に有生物を取ることはできない。同様に「すごい」や「激しい」も「番組への反響がすごい」「川の流れが激しい」のように argument に非有生物のみをとる「非有生述語」である。このような「非有生述語」は「非常のホド」の補足成分にはなり得ない<sup>4</sup>。しかしこのような述語でも、argument の取り方を変え、有生物が関わる argument を加えて「有生述語」にすると、「非常のホド」の補足成分となることが可能になるようだ。例えば「明らかだ」という「非有生述語」を「～にとって」<sup>5</sup>という有生物が関わる argument を加えることで「有生述語」に変えてやると、次の(3')のように「非常のホド」の補足成分となることができる。

- (3') c. 彼女の話は子供にとっても明らかなほど疑わしかった。

<sup>4</sup> この点については、田中大輝氏の示唆によるところが大きい。

<sup>5</sup> この「～にとって」に関する研究は、内田（1991）の“1. 文法解釈における論理的ということ”（pp.29-33）に詳しい。

他にも「非有生述語」とされる述語は、次の(20)のように「非常のホド」の補足成分にはなり得ない<sup>6</sup>。

- (20) a. \*この花はすばらしいほど美しい。  
b. \*彼女の負った心の傷はひどいほど深い。  
c. \*地道な努力でゆるぎないほどの地位を築く。

以上より、「非常のホド」の補足成分となるためには、補足成分の述語の argument に有生物が必ず関わる「有生述語」でなければいけない、という条件が考えられる。ただし、「非有生述語」であっても、有生物が関わる argument が加えられて「有生述語」に変われば、補足成分となり得るようである。

### 2.3. 補足成分が節である場合

これまで「非常のホド」の補足成分に語が来る場合を例に挙げて考察を進めてきたが、ここで補足成分に節が来る場合について考えてみたい。下に、補足成分が節である「非常のホド」の例を挙げてみる。

- (21) a. この本は頭が痛くなるほど難しい。  
b. この映画は何度見ても飽きないほど好きだ。  
c. 10人で食べても食べきれないほど大きなケーキ  
d. 天地がひっくりかえるかと思ったほどすごい雷鳴だった。(奥津 1986:63)  
e. 歌を歌ったり、ゲームをしたりする<sup>7</sup>ほど元気になった。(村木 2002:97)

<sup>6</sup> ちなみに「非有生述語」とされる述語は、「ホド」のような“程度を表す副詞”の補足成分となくとも、次の例のように、それだけで“程度を表す語”として働くことができる。

- (i) a. 彼女の話は明らかに疑わしかった。  
b. 彼はすごく成績が良い。  
c. 雨が激しく降っている。  
d. この花はすばらしく美しい。  
e. 彼女の負った心の傷はひどく深い。  
f. 地道な努力でゆるぎない地位を築く。(飛田・浅田 2001:579)

<sup>7</sup> 連用節。後続の形式に接続するが、意味上の限定をしない並列節である。

このように、「非常のホド」の補足成分に節がくる場合は、その内容も長さも種類も実にさまざまである。またその中には、奥津(1986)でも述べられている通り、以下のように慣用化したものも多い。

- (22) a. のどから手が出るほど欲しい。  
b. 目がまわるほど忙しい。(a,b 両文とも、奥津 (1986:56))  
c. 体に穴が開くほど見つめられる。  
d. 顔から火が出るほど恥ずかしい。

ここで下に挙げる例を見てほしい。

- (23) a. いつも冷静な彼がかなり動揺したほど、そのニュースは衝撃的だった。  
b. こってり好きの私にもちょっとしつこいほど濃厚なスープ  
c. 彼女の話しはその慌てた態度からも明らかほど疑わしかった。  
d. 放送開始直後から反響がすごいほど、その話題は今注目されている。

実は、これらの例に用いられている補足成分はどれも、前述の「非常のホド」の補足成分に求められる条件(24参照)に反している。(23a,b)の補足成分には「かなり」や「ちょっと」といった“程度を表す副詞”が付いているし、(23c,d)の補足成分の述語は、その argument に有生物が関わっていない「非有生述語」である。それにも関わらず、上の例はどれも「非常のホド」の用法として容認できるものと思われる。このことから考えると、どうやら「非常のホド」の補足成分に求められる条件は、補足成分が語の場合と節の場合によって異なるようである。補足成分に語がくる場合は、

- (24) a. 補足成分に“程度を表す副詞”が付いていてはいけない。  
b. 補足成分は、その述語の argument に必ず有生物が関わる「有生述語」でなければいけない。

という二つの制約が補足成分に与えられるが、補足成分に節がくる場合は、この二つの制約に反していても、「非常のホド」の補足成分となり得る。補足成分に節がくる場合は、補足成分に語がくる場合と違って、「ホド」の補足成分に厳密な条件を必要としないようである。

さてここでもう一度(3'a,b)の例文を思い出してほしい。

- (3') a. \*[かなり驚く]ほどよく落ちる。

b. \*彼は相当しつこいほどメールを送ってきた。

2.2.2.節で上の例文をもとに、「非常のホド」の補足成分には“程度を表す副詞”が付いてはいけなく、という条件を提案したが、(23a,b)は補足成分に“程度を表す副詞”が含まれているにも関わらず、容認される文となっている。この差は何であるか。これには、補足成分が語である場合と節である場合とで“程度を表す副詞”の「ホド」への関わり方が違うから、ということが理由として考えられそうである。補足成分が語である場合、例えば(3a)を見ると、「かなり驚く」という形で“程度を表す副詞”が直接「ホド」に関わる形になっているが、補足成分が節である場合、例えば(23a)を見ると、「ホド」に直接関わるのは「いつも冷静な彼がかなり動揺した」という節全体であり、“程度を表す副詞”「かなり」はその節内の「動揺した」という述語にのみ直接関わる。つまりこの場合、“程度を表す副詞”は「ホド」に直接関わっていないのである。以上より、語が補足成分となる場合に、補足成分に“程度を表す副詞”が付いていると意味が重複する理由には、その“程度を表す副詞”が直接「ホド」に関わるということに関係があるようである。

それでは次に、(3'c)の例文をもう一度見てみよう。

(3') c. 彼女の話は子供にとっても明らかなほど疑わしかった。

2.2.3.節において、この文はもともと「非有生述語」だった補足成分に「～にとって」という有生物が関わる argument を加えることで補足成分が「有生述語」に変わったため、「非常のホド」の補足成分となることが可能になった、と推測した。しかし、補足成分が節である場合は(23c,d)のように、有生物が関わる argument を取らなくても補足成分となり得るため、(3')については、「非有生述語」を「有生述語」に変えたことで文が容認できるようになったわけではなく、argument の数が増えて補足成分が節になったことで文が容認できるようになったと考えるほうが妥当である。

以上の考察から、補足成分が節である場合に補足成分に求められる条件には、補足成分が語である場合のように厳密なものはない、ということが分かった。強いて言うならば、2.1.節で述べた「補足成分の内容が非常の事柄を表していること」というのが原則的な条件として言えるだろう。しかしこれは前述の通り、この条件を満たせば必ず「非常のホド」の補足成分になり得る、と言える類の条件ではない。よってこれは、(24)のように補足成分となり得るかどうかについて決定的な線引きをする手段にはならないが、「非常のホド」の補足成分となる節は必ず満たしているべき条件である。

### 3. まとめ

以上、「非常のホド」を用いた表現が容認されるための条件について考察してきたが、その一番大きな要因となるのは「ホド」の補足成分である。そして「非常のホド」の補足成分に求められる条件について考える際、補足成分が語なのか節なのかというのは、一つの重要なポイントとなる。

もし補足成分に語が来る場合、その語には次の二つの制約が与えられる。

第一に、「非常のホド」の補足成分には、“程度を表す副詞”が付いてはいけなく。これは、「ホド」が程度を表す副詞であるため、補足成分そのものも程度を表しているという意味が重複してしまうためだと考えられる。具体的に言うと、例えば「驚く」や「痛い」は「非常のホド」の補足成分になり得るが、「かなり驚く」や「とても痛い」のように程度を示す副詞が付くと、補足成分にはなり得ない。また、この制約は補足成分が節である場合には適用されないことから、このような“程度”の意味の重複は、“程度を表す副詞”が「ホド」に直接関わることによって起こるものと思われる。

第二に、「非常のホド」の補足成分は、その述語の argument に有生物が必ず関わる「有生述語」でなければならない。例えば、「驚く」や「しつこい」のような「有生述語」は「非常のホド」の補足成分になり得るが、「明らかだ」「すばらしい」のような「非有生述語」は補足成分が節の場合に用いられた時のみ「非常のホド」の補足成分になり得る。

一方、補足成分に節がくる場合は、補足成分に特に制約は与えられない。もし補足成分に「かなり」や「ちょっと」などの“程度を表す副詞”が付いていても補足成分となり得るし、補足成分の述語の argument に有生物が関わってなくても補足成分として容認される。ただし、「非常のホド」の補足成分となる節は、原則として、その内容が非常の事柄を表しているべきである。

以上の考察から、我々は「非常のホド」を用いた表現をする際に、その補足成分に語を用いる場合と節を用いる場合とで、多少異なる用い方をしている、ということが推測できる。補足成分に語を用いる場合、私たちは「驚くほど」や「おもしろいほど」のように「ホド」を含む句をあるひとかたまりの語として捉えているのではないか。つまり補足成分と「ホド」の組み合わせを、一種の熟語のようにして用いているのである。従って、それに「かなり」や「非常に」などの語を付けることは、熟語に余分な語を付けることになるため、「ホド」を含む句全体の印象が不自然になってしまうのである。さらに付け加えられる語が“程度を表す副詞”であった場合、それが「ホド」に直接関わることで「ホド」を含む句全体の“程度”の意味が重複するため、その理由からも句が不自然になる。

それに対し補足成分に節を用いる場合は、補足成分が長い場合、私たちはもともと

補足成分と「ホド」をひとかたまりには捉えていないと思われる。そのため、補足成分に語が付け加えられても、特に「ホド」を含む句が不自然に感じられたいはしない。さらにこの場合、付け加えられる語が“程度を表す副詞”であったとしても、その要素は「ホド」に直接は関わらず、補足成分の述語にのみ直接関わるので、何ら問題はない。

以上より、「非常のホド」の補足成分となり得るための条件は、以下のようにまとめられる。

(25) a. 補足成分が語の場合:

1. 補足成分に“程度を表す副詞”が付いていてはいけない。
2. 補足成分の述語の argument には有生物が関わっていなければならない。

b. 補足成分が節の場合:

補足成分は、原則として非常の内容を表す事柄であること。

よって本論文の結論は以下の通りである。「非常の程度を表すホド」を用いた表現が容認される条件は、「ホド」を修飾し補足する「補足成分」が語であるか節であるかによって異なる。補足成分が語である場合には、「ホド」は補足成分となり得る語を選び、さらに補足成分に修飾語が付くことを許さない。一方、補足成分が節である場合は、「ホド」は補足成分に特に制約を与えず、補足成分が語である場合に与えられる制約に反していても良い。したがって、節が「ホド」の補足成分となる場合には、実にさまざまな種類の節が補足成分として用いられ得る。これらの補足成分に求められる条件は、原則としてその内容が非常の事柄を表すこと、という程度のものである。このように、「非常の程度を表すホド」は補足成分が語である場合も節である場合も、どちらも「ホド」に付いて程度を表すという点では共通するが、実はその構造には大きな違いがあり、したがって両者に求められる条件もこのように異なる。

## Appendix

今回「非常のホド」を研究するに当たって、ホドのその他の用法についても考察する機会を得た。そのような考察を経て得られたもののうち、名詞的な用法については第1章で触れたが、副詞的な用法については、その内容が膨大なため、本論文中にその全てを盛り込むことは難しかった。そこでここに、「非常のホド」以外の副詞的な用法のうち、本論文の主題には直接関係しないが、ホドの用法を知る上で重要であると思われる内容をまとめておく。

### 1. 比例のホド

この用法は「ホド」の四種類の副詞的な用法のうち、「非常のホド」と並んで使用頻度が高い用法の一つである。この「ホド」の用法は、補文の内容がある程度を移動すると、それにつれて主文の内容の程度も移動するという比例関係を表す<sup>8</sup>。「S ば S ほど S」という形が多いが、条件を表す「S ば」は必ずしも必要ではない。下に例文を挙げる。

- (26) a. 言うほどおれが非に落ちる。  
b. 争えば争うほど二人の孤独は深まった。  
c. 油の成分など簡単なほどよいのである。(奥津 1986:60)

また、比例のホドには主文と補文の述語の同一という条件はないが、仮に同一であっても、次のように消去することはできない。

- (27) a. 太郎が怒るほど 次郎も怒る  
b. \*太郎 ほど 次郎も怒る (奥津 1986:60)

「非常のホド」と「比例のホド」とは、どちらも補文を取る形で形の上では同じように見えるが、奥津 (1986)によると、この二つのホドの間には次のような相違点がある。

- (28) 非常の程度の構文も比例構文も、因果関係を示すことがあるが、その際の主文と補文の役割が逆になっている(例参照)。

---

<sup>8</sup> 奥津 (1986)にはこのように書かれているが、S の部分には必ずしも文が来るとは限らない。動詞や形容詞、形容動詞が来る場合もある。

例： 非常の程度：(そんなに) 太るほど食べる (のはよくない) <結果+ほど+原因>  
 比例の程度：(食べれば) 食べるほど 太る。 <原因+ほど+結果>  
 (奥津 1986:61)

それではここで、他の2つのホドでは因果関係がどうなっているのかも見てみよう。

- (29) 「通常のホド」  
 まあぶっ倒れないほどに / 程度に練習しなさい。 <結果+ほど+原因>
- (30) 「同程度のホド」  
 日本はアメリカほど大きくない。 <比較の基準+ほど+比較する事柄>

以上より、「通常のホド」の因果関係は「非常のホド」と同じ順序であり、「同程度のホド」は、特に因果関係は表していないという事が分かった。

さらに奥津 (1986)では、「非常のホド」と「比例のホド」の相違点の一つとして、「非常のホド」は任意で「に」を取るが、「比例のホド」は「に」が取れないとしているが、以下の例文が示すように、「比例のホド」も「に」を取る事は可能である。

- (31) a. 噛めば噛むほど(に) 味が出てくる。  
 b. 使えば使うほど(に) 愛着がわいてくる。

ちなみに「非常のホド」と「比例のホド」は、それぞれが補足成分に取る品詞にはどのような違いがあるのだろうか。「非常のホド」は、補足成分に動詞や形容詞、形容動詞を取ることができるが、「比例のホド」は動詞の他に形容詞や形容動詞を取ることができるだろうか。ついでに「通常のホド」についても見てみよう。

- (32) 「比例のホド」  
 a. 材料費は(安ければ)安いほど良い。 (形容詞)  
 b. 女性はおしとやかなほど良い。 (形容動詞)
- (33) 「通常のホド」  
 a. お酒は、ほろ酔いで気持ち良いほどに / 程度に飲むのがよい。  
 b. まずは目標を簡単なほどに / 程度に設定する。

「比例のホド」は、問題なく形容詞や形容動詞を補足成分にとることができる。「通常のホド」も上の例のように形容詞や形容動詞を取る事は可能だが、この用法の場合は、「ほどに」を用いるよりも「程度に」を用いる方が自然である。「同程度のホド」については、この用法では通常「NP ほど Pred」という文形を取るため、ホドの前に形容詞や形容動詞がくる事はない。

## 2. 通常のホド

この「ホド」の用法は、基本的に通常の事柄について、その内容が通常の程度である事を示す。但し、通常の事柄に単にホドを付けるだけでは、通常のホドにはならない。

- (34) ぶっ倒れる ほど 練習しろ。 (非常のホド)  
 \* ぶっ倒れない ほど 練習しろ。

- (35) 病気になる ほど 勉強した。 (非常のホド)

「ぶっ倒れる」や「病気になる」は非常の事柄だが、これに対して「ぶっ倒れない」「病気になるない」は通常の事柄である。これをそのまま補文にすると上の例のように非文になってしまう。これを「通常のホド」として文法的な文にするためには、ホドに「に」をつけると良い。しかし「ほどに」の代わりに「程度に」を使った方が、響きとしてはより自然になり、通常はこちらの方が多く使われる。また、「ホド+に」の形態は非常のホドの用法でも見られるが、「程度に」は非常のホドには使用できず、文中に「程度に」を用いてある場合、その意味は「通常の程度」のみに限られ、「非常の程度」を示すことはない(例(37)参照)。

- (36) まあぶっ倒れないほどに / 程度に練習しなさい。  
 (通常の程度+ほどに / 程度に)  
 \* ぶっ倒れる程度に練習しろ。(非常の程度+程度に)
- (37) \* 病気になる程度に勉強した。(奥津 1986:57) (非常の程度+程度に)

さてここでそれぞれの「ホド」の用法について、「ほど」という形の代わりに「ほどに」「程度に」が用いられる場合について考えてみよう。通常のホドは、常に「ほどに」か「程度に」という形を取る。非常のホドは、前述の通り「に」は任意である。それでは、同程度のホドと比例のホドについてはどうだろうか。

(38) 「同程度のホド」

日本はアメリカほど大きくない。

日本はアメリカほどに大きくない。 (同程度+ほどに)

\* 日本はアメリカ程度に大きくない。 (同程度+程度に)

(39) 「比例のホド」

(食べれば) 食べるほど 太る。

(食べれば) 食べるほどに太る。 (比例の程度+ほどに)

\* (食べれば) 食べる程度に太る。 (比例の程度+程度に)

以上より、「ホド+に」は「通常のホド」は普通この形態を取り、「非常のホド」「同程度のホド」「比例のホド」には任意の要素として「に」を付けることも可能である。一方「程度に」は、「通常のホド」の用法でしか使えない。

### 3. 同程度のホド

この「ホド」の用法では、ホドは名詞句について「NP ほど Pred」という形をとり、主文の述語は通常否定の形をとる。

(40) a. 日本はアメリカほど大きくない。

b. 巨人はヤクルトほど弱くない。 (奥津 1986:58)

c. 私ほど愚かなものはない。 (鈴木・林 1984:87)

例えば(40b)の文は、巨人をヤクルトと比較しており、ホドの前の名詞は比較の基準を示すとよく言われる。それはその通りだが、まずこの文の意味は「巨人はヤクルトより強い」というのと論理的には同じである。「より」が、先行する名詞を比較の基準として他の名詞との不等関係を示すのに対し、ホドはまず「巨人とヤクルトが同じ程度に弱い」と言って、それを否定することによって「巨人の方がヤクルトより強い」という意味を表すのである。さらに(40b)の文の否定は「ヤクルトは弱いが、巨人は弱くない」とただ「弱い」を否定しているのではなくて、「ヤクルトも巨人も弱いが、ヤクルトと同じ程度に巨人が弱い、ということはない。」というように、先行する二文全体に否定がかかっていると見るべきである。

(41) [ヤクルトが弱いほど巨人が弱い] ない (奥津 1986:59)

このように考えると、ホドは表層的には名詞だけを取っているが、実は主文と同じ述語を持つ補文を取るのである。そして、共通する述語部分を補分から消去した結果、名詞だけ残ったのが「NP ほど Pred」の形だと考えられる。この点から、ホドの前の名詞は、本来は格助詞を伴ったものであり、それゆえ後に述語を要求する「補文」の一要素であると言える。その補文から、主文と同一の要素が格助詞も含めて消去されるので、文に曖昧さが生じるのである。

それではここで、それぞれの「ホド」の用法について「ホド...ない」という形を取ることができるか見てみよう。「同程度のホド」は通常否定の形を取ると述べたが、他の3つのホドについてはどうだろうか。

(36) 「通常のホド」

まあぶっ倒れないほどに / 程度に練習しなさい。

\* まあぶっ倒れないほどに / 程度に練習するな。

(42) 「非常のホド」

彼はあきれるほどよく働く。

彼はあきれるほど働かない。

(43) 「比例のホド」

見れば見るほどかわいい。

見れば見るほどかわいくない。

以上より、「・・・ない (or するな)」という否定の形態は、「非常のホド」と「通常のホド」ではあり得るが「通常のホド」ではあり得ない。

### 謝辞

本論文を執筆するに当たり、指導教官の上山あゆみ先生には、ご多忙の中、貴重なアドバイスと丁寧なご指導をいただきました。ここに厚く感謝の意を表します。また、九州大学大学院生の田中大輝氏にも、多大なご協力をいただきました。ここに記して心より感謝いたします。

## 参考文献

1. 内田賢徳 (1991) 「主語をめぐる助詞の用法区分について」久野暲, 柴谷方良編 『日本語学の新展開』くろしお出版 pp.29-44.
2. 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』大修館書店.
3. 奥津敬一郎 (1986) 「形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社 pp.28-104.
4. 国立国語研究所 (1962) 『現代雑誌九十種の用語用字(1)』秀英出版.
5. 佐久間鼎 (1992) 『現代日本語の表現と語法』くろしお出版.
6. 鈴木一彦, 林巨樹 (1984) 『研究資料日本文法 第5巻 助辞編(一) 助詞』明治書院.
7. 仁田義雄 (1991) 「拡大語彙論的統語論」久野暲, 柴谷方良編 『日本語学の新展開』くろしお出版 pp.45-77.
8. 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
9. 飛田良文, 浅田秀子 (2001) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版.
10. 村木新次郎 (2002) 「日本語の文のタイプ・節のタイプ」飛田良文, 佐藤武義編 『現代日本語講座 第5巻 文法』明治書院 pp.79-100.
11. 望月郁子 (1969) 「類義語の意味領域 ホドをめぐって」『国語学』78.
12. 森田良行 (2002) 「日本語の助詞・助動詞」飛田良文, 佐藤武義編 『現代日本語講座 第5巻 文法』明治書院 pp.38-54.